

A. A. ミルン『ぼくがとても小さかったころ』：翻訳と評釈

A Translation and Exegesis of A. A. Milne's *When I Was Very Young* (1930)

楚 輪 松 人

Matsuto SOWA

【1】

末っ子は「よい子」と話が決まっているように、ぼくは家族のなかの「よい子」だった。目は青く髪は金髪だ。兄たちも同じ青い目の金髪だったけど、彼らには本物の「青と金」だけがもつあの何かが欠けていた。ぼくみたいに、断然、良くはなかったのだ。事実、長男のデイヴィッドは、断然、悪童 [ワル] だった。彼は、世の親たちに、子どもというよりも警告として与えられたような男の子だった。ぼくらはよく言われたものだ。よく考えてごらんさい、ジョンとアラン。片方にはジョージ・ワシントンや小さい頃のネルソン提督やジェームズ・ワットのような偉い人がいるわ。もう片方にはデイヴィッドみたいな子がいる。あなたたち、どっちをお手本にするつもり？

後になってから、再び、アラン、あなたはジョンみたいな子になりたいの？ と考えさせられたのも末っ子としての特権だった。ジョンは急にぐれてしまったが、果たしてぼくも急にぐれたのだろうか。正直いって、ぐれてみようとしたけれど、ぼくの見たい目 [ルックス] が邪魔をしたのだ。ぼくは家族のなかの「よい子」でいつづけたのである。

デイヴィッドはジョンよりも1年と3ヵ月

年上で、ジョンはぼくよりも1年と3ヵ月年上だった。仲間の数としては2人がいちばんだから、ジョンが、ぼくと同じくらい幼いのか、それともデイヴィッドと同じくらい大人なのか決めることになり、幸いにもジョンはぼくを選んでくれた。デイヴィッドは一人で悪の道を行き、ジョンとぼくは一緒にぼくたちの道を行ったわけである。ぼくたちはいつも一緒だった。ある時などは、夜、寝る時も一緒だった。当時、嫌なことがあったとすれば、それはジョンとひとつ同じベッドに一緒に寝なければならぬことだった。無論、家にいる時には一緒なのは部屋だけで、消灯後、ジョージ・ワシントンや小さい頃のネルソン提督なら決してしないような悪いお行儀で話しこんだ。でも、他の屋根の下——よその家や田舎の宿——に泊まる時などには、ぼくたちはあるもので満足して、それを最大限利用せねばならなかった。そのようにベッドを共にしなければならぬ時には、度重 [たびかさ] なる烈しい取っ組み合いが始まった。手、頭、脚のすべてを巻き込んでの総力戦である。思うにぼくたちは小さな子犬みたいなものだった。いつもケンカばかりしているけれど、相手がいないとお互いとてもみじめだったので

ある。



Many bitter fights did we have over those joint occupations, hands, head and feet all engaged at once. We were like puppies, always quarreling, yet miserable without each other

【2】

夜遅くまで話しこむのがぼくたちの習慣だったことは述べた。ぼくたちは眠りがやって来るまでの間、夢を語り合った。夢のなかでは、ぼくたちは、巨額の財産を相続し、ゴルフ大会で優勝し、美しいプリンセスや若くハンサムなプリンスに出会って愛され、無人島や都会の雑踏でも陽気な冒険などをした。夢のなかでは、事務員が偉大な冒険者となり、売り子の少女は有名な歌手となった。ジョンとぼくは、同じ夢、同じ楽しい幻想を分かち合ったのだ。「おやすみなさい」という一日の最後の挨拶が言われるとすぐさま、ぼくたちは、暗がりのなか2人だけで語り合った。どんなに愉快的ことになるだろう！もし、世界中のほかのだれもかれもみんなが頓死してしまい、ぼくたち2人だけが取り残されることになったら！ただ仮定するだけの話だったけど……。そんな愉快的時間をぼくたちは過ごしたのだ！

何時間も何時間も、ぼくたちはそんな事態がいつ起こってもいいように、自分たちの計画について話し合った。朝、目が覚めた途端、それが現実のものとなったことはすぐにわかる。朝の洗面に女家庭教師が姿を見せないこと、彼女の部屋とぼくたちの部屋を結ぶ廊下

での彼女の遺体の発見——これらは最初のしるしとなるだろう。屋敷中を隈なく探検して、事態が適切に運んでいること、また「ダメですよ」と命じる生存者は1人もいないことを確認すると、かくかくしかじかの菓子屋[スイート・ショップ]に行き、お店の女主人の屍[しかばね]をまたぐと、ぼくたちの最初の正式の朝食をとるのだった。



Having explored to see that there were really no survivors to say, "Don't," we would step over the body of the proprietress and have our first breakfast

そして、その他色々。最初にこの夢を見始めたのはぼくたちが5歳か6歳の頃だったと思う。そしてそのことはぼくたちの間では何年間もつづいた。今となれば、それが現実的ではなかったことや、それを夜毎の祈りの課題にすることも間違っていたこともわかっている。でも、そういうことが実際に起こればとても愉快だったろう。少なくとも、一日かそこらの間は。

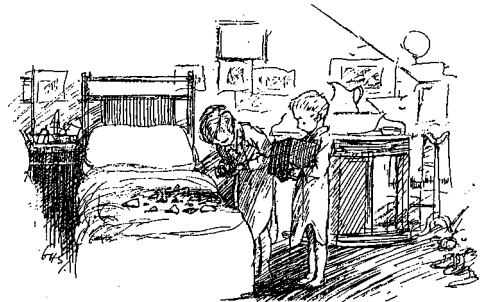
【3】

ジョンとぼくはありとあらゆるもの、生きてるものから死んだものまで、毛虫から針鼠、切手から鳥の卵まで、何でも収集した。ある時分には「鉱物」のコレクションもあった。このコレクションは、夜毎、ぼくたちのベッドの上に広げられると、すっかり堪能してか

ら、再び片づけられた。それには20ばかりの簡単な標本が含まれていた。氷州石 [アイスランド・スパー]、長石 [フェルスパー]、石英 [クォーツ]、菊石 [アンモナイト] がひとつか2つ、それに名前は忘れてしまったが、はんばな化石や石である。青蛍方解石 [ブルー・ジョン・スパー] などという石は実在するのだろうか？ その名前が記憶に残っている。もし存在するなら、毎晩のように、ベッドの上で披瀝されたのである。もし存在しないとすれば、多分、正体不明の何かのためにその名前を発明したのだろう。当時、ぼくたちはセント・ジョンズ・ウッドに住んでいた。ある日のこと、ぼくたちは「地質博物館」に標本をもっていくことに決めた。「地質博物館」はピカデリーとジャーミン・ストリートの間にあったが、彼らが所蔵しているコレクションとぼくらのコレクションとを比べるためだった。ぼくたちは8歳と9歳くらいだった。そんな年齢の小さな2人の少年にとって、セント・ジョンズ・ウッドからピカデリー・サーカスまでの道のりは遠い危険な道りだった。でも、ぼくたちは自分たちだけであちこち外出するように育てられていたし（ぼくが6歳の頃、ジョンとぼくは2人だけで田舎へ遠出の散策に出かけたものだ）、そしてひとつの約束のもとに外出許可が与えられていた。すなわち、ピカデリー・サーカスを渡るときにはお巡りさんと一緒だよという約束である。

ぼくたちは「地質博物館」に無事到着し、館長 [キュレーター] 専用の執務室に毅然 [きぜん] たる態度で向かい、彼の目の前にぼくたちの所有する鉱物コレクションを広げた。一瞬、館長はぼくたちがそれを国家に寄贈するつもりでやってきたものと考えたようだったが、ぼくたちはすぐさま彼の誤解を訂正した。ぼくたちが本当に知りたかったのは

次のことだけだ。右から5番目の石は菊石 [アンモナイト] か、それとも剽軽 [ひょうきん] な伯父さんが言ったように、ただの日付石 [デート・ストーン] に過ぎないのか。館長は、このことや他の多くのことについても教えてくれ、博物館のなかも案内してくれた。まさしく親切そのものだった。館長を後にすると、ぼくたちは家に向かった。



The collection was laid out on one of our beds every night, gloated over and put away again

【4】

帰り道、ピカデリーにはまったく人気 [ひとけ] がなかった。35年前にはそんなことがあり得たのである。ぼくたちは閑散とした通りの片側に立って、「お巡りさんと一緒だよ」という約束を思案していた。お巡りさんの助けは本当に必要なのだろうか？ でも、約束は約束だ。ただ1人、頼めそうなお巡りさんが通りの向こう側にいた。とてもバツの悪い状況だった。ぼくたち、困っているんですけどという合図をした。お巡りさんは心配そうに道を渡ってきた。ぼくたちは言った。「向こう側まで連れて行ってもらえますか？」冗談でも言っているのかといふかりながら、彼は言った。「さあ、さあ、走って、走って」。ぼくたちは走った。約束は守られたのである。

ぼくたちにはお小遣いが3ペンスあった。そのうちの1ペニーはピカデリー・サーカスで買った「耐風マッチ [フュージー]」1箱

に消えた。ぼくたちはその場でそのうちの1本を神妙に擦った。残りは、夜、消灯後、寝室で同じように神妙に擦るためにとっておいた。これでぼくたちそれぞれの手元には1ペニーが残った。ぼくたちはリージェント・ストリートで菓子店の店内を外から覗き込みながら、残りのお金をいちばん有効的に使うにはどうすればいいものかと思案していた。ジョンはショーウィンドウの一方の端に、ぼくはマッチ箱を手にして反対側の端に立っていた。1人の老紳士がそばを通り過ぎ、ぼくを見て立ち止まった。ぼくは予算オーバーの、クリームの入ったふわっとしたジャムケーキを目の前にして、とても可愛らしく、もの悲しそうに見えたのである。「幼年時代、天国はぼくらのすぐ近くにある」と言われる。実際、想像に耽っている間、ぼくは天国にとても近いところにいた。老紳士はその光景に耐えられなかった。彼は大きく鼻をかむと、「チッ、チッ、チッ」と、数回、舌打ちして、恭[うやうや]しく、ぼくが持っていたマッチ箱の上に1シリングを置き、そのまま泣き声で言い訳をするように、独り言を言いながら急ぎ足で立ち去った。



I was looking terribly sweet and wistful in front of a too-expensive jam puff with cream in it. The old gentleman couldn't bear it

【5】

ぼくたちはどんなに嬉しかったことか！ ああ、読者の皆さんには想像もつかないでしょう。また幸いにもその親切な老紳士もわかっていなかった。知らない人からお金はもらってはいけませんよとぼくたちは躑[しつけ]られてきた——では、どうやってこの1シリングをもらうことができようか？

それをもらおうとぼくたちはできるかぎりのことをやってみた。自分たちに次のように言い聞かせたのである。

あんな親切な人が知らない人のはずがない。多分、あの人は天国からやってきた天使なんだ。

いずれにせよ、今からお金を返すには遅すぎる。

知らない人から1ペニーをもらっちゃいけないけれど、1シリングとなれば話は別だ。

クリームの入ったふわっとしたジャムケーキは2ペンスする。

でも、みんな何の効果もなかった。約束は約束だ。それも守らねばならない恐ろしい約束だ。ぼくたちは店のなかに入ると、自分たちのペニーを使い、さっきもらった1シリングを小銭にくずしてもらった。そのうちの6ペンスは、好都合にもカウンターの近くにあった宣教師団の献金箱のなかに消えた。当時、ジョンは中国人のために何か具体的なことをすることを切望していた。中国人についての本を読んだばかりだったからである。3ペンスは、同じく好都合にも角を曲がったところにいた交叉路掃除人に与えた。最後に残った3ペンスは家に持ち帰ると、鏡台の引き出しの中にしまい込まれ、2度と顧みられることはなかった。当時、「よい子」でいなければならなかった頃、ぼくたちは本当に「よい子」だったのである。

【6】

7歳の時、ぼくは演劇の世界にデビューした。兄たちとぼくは『黄金の鍵』という題名だったか、美しい物語を読んで、大いに感動していた。それは、貧しいながらも愛らしい女家庭教師の物語で、彼女は、近隣に住む金持ちの公爵から求婚されて、結婚を承諾した。その結果は公爵の親戚筋は大いにむかつくところとなり、さまざまの擦った揉んだの挙句、愛こそすべての扉を開く「黄金の鍵」であり、最終的にはグウェンドリンとベルトラヴァーズ第10代伯爵は無事結婚した。ぼくたちは両親のためにこの美しい物語をドラマ化し、上演することに決めた。

チャールズという名の10歳になる幼い友だちが主人公〔ヒーロー〕に、ぼくには女主人公〔ヒロイン〕の役が振り当てられ、そして兄たちはさまざまな役柄を演じた。ぼくたちは元のストーリーをいくつかのふさわしい場面に分けたが、実際の会話はその時の思いつきに任せ、脚本にはただ台詞〔せりふ〕があることだけを示した。

ぼくの最高の見せ場は、主人公〔ヒーロー〕がぼくに求婚する場面だった。どんな種類の本であれ、ぼくたち兄弟は飽くなき読者だったから、最高級の求婚というものがいかになされるべきか正確に知っていた。でも、チャールズは文学に造詣のない子どもだったので、これらの秘儀には不案内であった。

そこでぼくたちは彼に説明した。ご婦人に結婚を申し込む時には、肝心の話題には徐々にゆっくりと至ることが肝要であること。すなわち、どんなことがあっても女性の感情を事前に試す前に、出し抜けて「あなたを愛します」などと言って、ショックを与えてはならないことである。チャールズは、もうすでにたっぷり汗をかいていたが、最善を尽くすと約束した。ぼく自身の役柄はもっと簡単だっ

た。チャールズの求婚に返事するだけでよいわけで、たとえどんなに神経質になろうと、それは育ちの良い女家庭教師ならば、そんな場合にはどうにも避けがたい、乙女らしきのおののきと見なされたのだから。

【7】

それでは、その夜のぼくをご覧ください。あずま屋に、坐って、待っている。膝の上に両手を乗せ、はにかんだ初々しさそのものといった格好。そこへチャールズ登場。



Charles has his opening line ready, the result of much anxious thought. He says in a husky voice, "Do you—" stops, clears his throat—

チャールズには最初の出だしの用意ができている。思いつきどころか、心配になって考え抜いた挙句の結果である。彼はハスキーな声でささやく。「あなた、——」と言いよどみ、咳払いをして、予期せぬ大声で問いかける。「あなた、リンゴはお好きですか？」

その問いかけに戸惑いながらも、答えやすい問いであることにホッとしてぼくは応じる。

「はい」。

チャールズは、恐い顔をして自分自身にうなずく。そこまでは万事順調。しかし、次は何だ？ 彼は、しかめ面をして、一步一步、不安そうに足をひきずる。ぼくは、心配そうに待つが、女性の方から率先して口をきくのは淑女らしからぬと意を固めている。チャー

ルズは、突然、光明を見出す。彼の顔はパッと明るくなり、ハスキーな声でささやく。「あなた、——」と言いよどむと、咳払いをして、大声で叫ぶ。

「あなた、梨はお好きですか？」

再度、何も難しいことはない。今度は声にもっと思慕の情を込めて答える。

「はい！」

再び、チャールズはうなずく。それから、心にわだかまる唯一の疑念も晴れやかとなり、今や本題に入ることができるといった調子で、ハスキー声で言う。「あなた、——」と言いよどみ、咳払いをすると、吠えるように言う。

「あなた、——ぼくと結婚してくださいますか？」

すぐさま、ぼくは答える。

「はい！」——そして緞帳 [どんちょう] が下りる。

【8】

ぼくたち3人が海の男になると決めた日があった。あの偉大な本、W. H. G. キングストンの『3人の士官候補生』を読んだ結果である。ぼくたち3人も士官候補生になって、アラブ人の沿海貿易用帆船を拿捕 [だほ] し、ナイフで鮫を切り裂き、口にロープをくわえ、山のような波頭を泳ぎ進んだものだった。これらのことを用心深く顔つき合わせて話した後、ぼくたち3人は意を決したことを父に告げるべく、階下の居間へ降りていった。厳粛な面持ちでなかに入って行くと、後ろ手にドアを閉め、年長のデイヴィッドの口を通して話を伝えた。

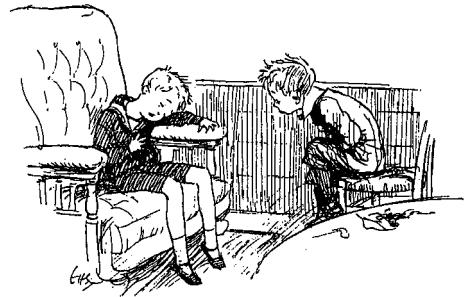
「ぼくたち、3人とも、船乗りになるつもりであることをお伝えするために、やって参りました」

これといった理由も、これといった時間でもないのに、ぼくたち3人がやってきたこと

は、父にはいささかびっくりする出来事であったに違いない。

しかし、父には十分な分別があった。父は、落ち着き払って、ただ次のように言っただけだった。「そうか。では、勉強しなくちゃならないな。試験に合格しなきゃならないからね」

この瞬間、デイヴィッドは船乗りにはなるまいと決心した。けれどジョンとぼくは、海での生活の準備を進めることに決めた。ぼくたちはよく長い散歩に出かけ、歩いている間もずっと歩調を合わせることに注意した。というのも、かなりの期間、2人の船乗りが歩調を合わせて行進できなければ、海軍では出世できないと感じたからである。ぼくたちは噛みタバコを噛む練習も試してみたが、船長がぼくたちを見て船酔いしやすいと誤解するといけないので、航海中に噛みタバコを噛むのは賢明ではないということになった。それで代わりに羅針盤の32方位について学んだ。



We also practiced chewing tobacco but decided it would be unwise to do this on board lest the captain should suppose that we were liable to seasickness.

子どもの頃、ぼくが特になりたいと願った職業は他になかった。しかし、8歳の時、ぼくは印刷物に初登場したと言っていいだろう。誰でも文学を職業として志す若い作家は、大事なことは才能よりも編集者とのコネであると確信している。後になってみればそんなことはないと思うが、8歳の時にはそれが正しいとぼくも思っていた。ぼくの最初の記事は

学校新聞に掲載された。ぼくの父がその学校の校長兼新聞編集者だったからである。ぼくにコネがあったことに間違いはない。この新聞は、10年前、1人の生徒によって創刊されたものだ。彼の名前はハームズワースだった。後になって、彼はもっと発行部数の多い新聞を創刊した。その新聞にぼくが初めて書いた当時、ライバルの寄稿者は科学の先生、ウェルズという名の青年——H. G. ウェルズだった。彼は今でも書いていると思う。

その点はぼくも同じである。

【9】

ジョンとぼくがベッドを共にしなければならなかった場合、必要に迫られた場合はいつもそうだったが、その時の敵愾心についてはすでに述べたとおりである。今、ベッドを共にしながらも、2人が友好関係を維持していた時が1度だけあったことを思い出した。それは幸福な機会とはるはずだった。しかし、ぼくにとっては、どういうわけか、そうではなかったのである。

それは、ぼくが今まで書いてきた頃よりもずっと後のことだった。ぼくたちが母校のパブリック・スクール、ウェストミンスター校にいた頃のことである。14歳くらいの頃だったろうか。週末には外泊許可が出され、そしてその時の同宿の仲間たち——大抵、父の経営する私立学校の年長組の生徒たち——は、心浮き立つようなお相手ではなかったけれども、ここでの食事には文句のつけようがなかった。当時のスキャンダラスといってもいいぐらいに栄養不足のパブリック・スクールの少年たちにとって、食事こそ唯一本当に大切なものだった。ぼくたちは日曜日は食べて過ごした。ぼくたちは自分の部屋に引き下がった。お腹一杯、満腹になって、1人用ベッドのある部屋に。そして、翌朝の、朝早いけれ

どもたっぷりの朝食が確実に食べられる見込み、それに加えて、大きなジャムの入った壺を学校に持ち帰られる見込みもあった。大きなジャムの壺、しかし、ああ、悲しや！ 壺はたったひとつだった。というのも、ぼくたちが泊まった家の女御主人は知らなかったのだ。パブリック・スクールでは、食事時間の間、ジョンとぼくは引き離され、そのような贅品を分かち合う方法 [すべ] などなかったことを。それでは、ぼくたちのどちらがジャムを食べることになるのだろうか？

ぼくたちのどちらが、何の見返りに、その喉から手が出るほど欲しいジャムの半分をあきらめられるというものか？ 深慮の挙句、ぼくは提案した。ジョン、ぼくの分け前をあげてもいいよ。もし、ぼくにぼくらの間のいつもの苦々しい争いの種、つまり、ベッドの右側に寝かせてくれるなら。

「合点承知之助！」とジョンは即座に言った。

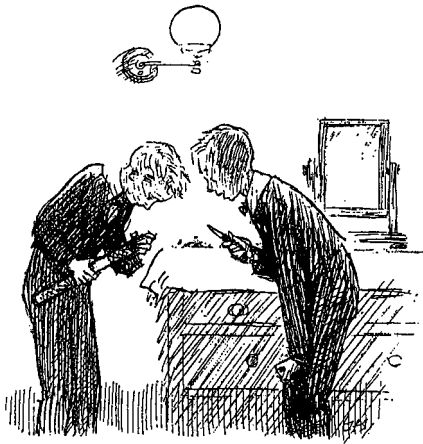
しかし、ぼくたちはまだ寝る態勢ではなかった。その日、その家で11月のお祝いの花火の残りが捨てられているのを発見した。こっそり試してみようとぼくたちはそれをベッドに持ち込んだ。片方の端を切り取ると、振って中味の火薬を鏡台の上に出した。思ったよりもずっと少なかった。

「それで全部？」とジョンが訊いた。「もっとあるはずだよ」

「そうかなー」と花火を振りながらぼくは言った。

「ガスにかざして見てごらん」とジョンは、才気煥発に提案した。

ぼくは花火をガスにかざした。ぼくたちは見た。文字通り一瞬の閃光 [きらめき] のうちに。ぼくたちは火薬が全部ではなかったことを理解した。ぼくはジョンよりももっと痛々しく理解した。



*"Hold it in the gas and see," suggested
John brilliantly*

【10】

家の女御主人が階段を駆け上がってきた。何が起きたの？ ジョンは大いに平静を装って、ドア越しに説明した。椅子をひっくり返したんです。もっと大きな音がしたような気がしたけど、と彼女は感じたようだが、ジョンは急いでもうひとつ椅子を付け加えた。2つの椅子でした。安心したように彼女は階下へ降りて行った。

ジョンはぼくの指のただならぬ状態（それはボロボロだった）に興味を示し、でも、かなりの同情はしてくれて、ぼくが服を脱ぐのを手伝ってくれた。同情するように自分の体をベッドの左側に無理に押し込むと、これまたできるかぎり同情するようにして寝た。そして、ぼくはといえば、ベッドに横になっていた。痛めた手の指も、心のなかも、大いに苦しみながら。というのも、こんな手ならば、ベッドの好きな側をぼくは選べただろうに。それなのに、求めさえすればぼくのものになっていたものと交換に、今や壺半分のジャムを手放してしまったのだ。

子どもの悲劇とはそのようなものである。

A. A. ミルンの『ぼくがとても小さかったころ』を読む

私の最初にして最後の哲学、私が一点の曇りもなく信じて疑わぬ哲学——私はそれを子ども部屋で学んだ。
——G. K. チェスタトン「おとぎの国の倫理学」
文学とは、ついに再び見いだされた少年時代のことではなからうか。

——G. バタイユ『文学と悪』

「子どもの本」は子どものためではなく作者自身のために書かれなければならない。

——A. A. ミルン

はじめに

前出の翻訳は、英国の作家アラン・アレクザンダー・ミルン (A. A. Milne, 1882-1956) の小品——*When I Was Very Young*. By A. A. Milne. Illustrations by Ernest Shepard. 26pp. New York: The Fountain Press, 1930——の全訳である。

不思議なことに、ミルン文学のキャンノン(正典)であるにもかかわらず、この作品はトウェイン社の批評シリーズ『トウェイン英国人作家叢書』(Twayne's English Authors Series)にも、またミルンの伝記の決定版 Ann Thwaite の *A. A. Milne: His Life* (1990) にも論じられていない。我が国でも「クマのプーさん」を特集した青土社の『ユリイカ——詩と批評』(第36巻第1号, 2004年1月号)にも、はたまた一人の執筆者の手になる本邦唯一のミルン研究書と言っても過言ではない、安達まみ氏の好著『くまのプーさん 英国文学の想像力』(光文社新書, 2002)でも忘れられたテキストなのである。また、先行批評としても、出版当時のわずか一篇の書評(しかも短評)があるのみである。前出の翻訳は、言うなれば封印されていたミルン作品の本邦初訳の試みであり、また以下の論考もミルン文学の理解に新たな光を投じることになる本邦初の批評行為である。以下、この知られざる作品の、1. 書誌について。続いて、その文学的意義について考察するために、2. 詩集『ぼくたちがとても小

さかったころ』との関係。3. ミルンの自伝『今からでは遅すぎる』との関係。4. 『クマのプーさん』との関係について論述し、この作品が、小品ながらも、子ども時代を謳歌するミルン文学のエッセンスであること、また、ミルン文学の本質を理解する上で恰好の作品であることを論じていきたい。

1. 作品の書誌情報

『クマのプーさん』(*Winnie-the-Pooh*, 1926)の生みの親として、あるいは名作推理小説『赤い館の秘密』(*The Red House Mystery*, 1922)の作者として、さらには映画化されたほどの大成功を収めた戯曲『ピムさん通れば』(*Mr Pym Passes By*, 1920)の劇作家として、生前、コラムニスト、雑誌編集者、推理小説家、劇作家、童謡詩人など、その八面六臂の大活躍にもかかわらず、無邪気で享乐的な生に憧れたエドワード朝時代の文学者、A. A. ミルンを正面から論じた研究書は驚くほど少ない。事実、この作家については、ミルン父子自身のものも含めて、いくつもの伝記が存在する程度である。海外において、まとまった一冊の研究書としては、前述の『トウェイン英国人作家叢書』の一冊、T. B. Swann の *A. A. Milne* (1971) が存在するくらいである。このように数少ない世界のミルン研究のなかで、瞠目すべきは、Tori Haring-Smith が編纂した堂々たるビブリオグラフィー(書誌) *A. A. Milne: A*

Critical Biography (1982) である。(本研究の途中で、御本人から絶版となったその高著のコピーを頂戴したことは特筆しなければならない。) 現在 Washington & Jefferson College 学長のヘアリング・スミス女史のこの精緻な文献目録、そして稀覯本を専門に取り扱う高価古書店のインターネット上の宣伝文句やカタログに掲載された情報を総合すると、本作品について次のような書誌情報が明らかになる。

1925年、本作品は、まず婦人雑誌 *Woman's Home Companion* の12月号に掲載される。「A. A. ミルンの『ぼくがとても小さかったころ』」(When I Was Very Young. By A. A. MILNE) というタイトルの下には、イタリック体のキャプション(説明文)として、「あの愉快的詩集『ぼくたちがとても小さかったころ』の作者自身の幼少年時代の物語。挿絵はアーネスト・シェパード」(*The author of that delightful book, "When We Were Very Young," writes the story of his own early years. ILLUSTRATED BY ERNEST SHEPARD*) とある。シェパードとは、生涯、ミルンの良きパートナーとして、彼のテキストにイルミネーション(光)を当て続けた挿絵画家、あのアーネスト・シェパード(Ernest Howard Shepard, 1879-1976) のことである。本作品は前作、1924年の童謡詩集『ぼくたちがとても小さかったころ』で始まった挿絵画家シェパードとの2回目の共同作業となる作品なのである。月刊誌に掲載されたこのテキストは相当な好評を博したに違いない。翌年の1926年、*The New Magazine* という名の婦人雑誌の6月号に、シェパードとは別人の手による挿絵とともに再録されている。さらに、1930年2月、再度、初出時とまったく同じ文章と挿絵で、可愛らしい装丁の美本、ミルン直筆の署名の入った、

小さな箱入りの愛蔵本となって、842部の限定版——ニューヨークのファウンテン・プレス社から603部とロンドンのメッシュエン社から239部——が販売された。当時としては破格の10ドルの値が付いている。この出版から半年後の8月17日、書評新聞『ニューヨーク・タイムズ・ブックレビュー』に「子どものための新刊書」と一括りにした書評コラムに以下の短評が掲載されている。短いながらも本作品に関する唯一の批評であり、また出版当時の評価としても興味深いものがある。Anne T. Eaton, *New York Times Book Review* (17 Aug. 1930) から該当部分の全文を紹介しよう。

『ぼくたちがとても小さかったころ』や『クマのプーさん』の愛読者なら、幼い頃のA. A. ミルンと彼の兄ジョンについての簡略なスケッチを収めた、この精妙な装丁の小著の出版を慶賀することだろう。2人の少年の職業選択の努力、素人演劇での初舞台、「ハームズワスという名の少年」が創設し、「科学の先生、ウェルズという名の青年、つまりH. G. ウェルズ」も寄稿した学校新聞への投稿、その他、子どもならではの体験にまつわるスケッチである。挿絵画家のシェパード氏は、いつものようにミルンの本文にユーモラスかつ適切な挿絵を添えている。(Eaton 15)

事実、この小品は作者ミルン自身の幸せな幼少年時代の回想から生まれた作品である。しかし、高価な限定版であったがゆえの悲劇と言うべきか、上述のように、この批評を最後として、本作品は封印されたも同然の状態となり、一般読者の目の届かないものとなった。また、作品についての批評も絶後の状態となった。いずれにせよ、爾来、作品そのものが広く知れ渡ることにはなくなったのである。

2. 詩集『ぼくたちがとても小さかったころ』との関係

次に、作家の執筆動機について考えてみよう。1925年と言えばミルンは当時43歳である。そもそも、何故、ミルンは、この作品、彼自身の幼少年時代について叙述するスケッチ(素描)を著したのか。また、この作品の文学的意義についてはどう考えるべきなのだろうか。

1924年、この作品が発表される前の年、ミルンは、作品のタイトルの下にあるイタリック体のキャプション(説明文)にも言及されている詩集『ぼくたちがとても小さかったころ』(*When We Were Very Young*)を出版している。子どもをテーマとしたこの童謡集は、従来の路線とは異なる新境地を開拓していた作家ミルンの新生、すなわち、それまでのコラムニスト、『パンチ』などの編集に携わってきた雑誌編集者、あるいは劇作家としてのミルンとは一線を画する新しい作家、児童文学作者ミルンの誕生を告げる詩集であった。その詩集の実体は、ミルン自身の言葉によれば、「はじめての子どものための詩、子どもについての詩、子どもによる詩、子どもと一緒にの詩、子どもからの詩をよせ集めた詩集」(安達 18)とあり、事実、彼の一人息子クリストファー・ミルンの子ども時代や、彼自身の子どもの時代にその靈感源を得た詩集となっている。注目すべきは、そこに明らかな作者ミルンの子どもへの眼差しである。作者は幼い子どもたちの姿を鋭敏に捉えて描写する。ちょうど挿絵画家が出来事のある瞬間を切り取って目に見える形で表現するように、詩人ミルンは子どもたちの心の動きや彼らの劇的な瞬間を活写する。この詩集は未だに好評を博している。実際、ミルンの詩行は、どんなに幼い聞き手にも、その心に響く躍動感の溢れる詩行となっている。爾来、この詩集

はR. L. スティーヴンソンの『子どもの詩の園』(*Robert Louis Stevenson, A Child's Garden of Verses*, 1885)と並んで、子どもを謳歌する英米詩の古典となったのである。

また、「あの愉快的詩集『ぼくたちがとても小さかったころ』の作者自身の幼少年時代の物語」とキャプション(説明文)にあるように、この『ぼくたちがとても小さかったころ』(*When We Were Very Young*)の続編として、この『ぼくがとても小さかったころ』(*When I Was Very Young*)は、タイトルの“*We*”(「ぼくたち」)が“*I*”(「ぼく」)へと変わっている。すなわち、その描く対象が、周囲の子どもたちからミルン彼自身へと移行し、結果的にはミルン自身がその幼少年時代を回顧する自伝的スケッチとなっているのである。

前述のキャプション、「あの愉快的詩集『ぼくたちがとても小さかったころ』の作者自身の幼少年時代の物語」という言葉に、読者は思わず興味をそられる。児童文学の創作に開眼し、子ども時代を韻文で謳う文学の創作に魅了されたミルンが、今度は散文で、しかも自らの子ども時代を描いたのである。当時、縦横無尽の活躍をした多才な文学者、A. A. ミルンの過ごした幼少年時代とは如何なるものだったのか。これを知るために本作品は恰好の材料である。読者の第一の興味は、作者自身の幼少年時代の「記憶の書」における題材の選択と集中である。つまり、ミルンは子ども時代の出来事をどのように取舍選択し、取り扱っているのだろうか。

文章化されたひとつひとつのエピソードを一読すれば、それらがミルンの幼少年時代の重要な体験であったことは読者に伝わってくる。ミルンの自伝的スケッチを鑑賞していると、読者はその心のうちにミルンの少年時代の幻影が忍び入るのを感じるのである。それ

らはミルンの幸福のカタログ、彼の人生における黄金時代の日々の記録、散文による子ども時代の思い出の回想録である。読者がこの作品から受ける印象は、ミルンの幼少年時代のエピソードと共鳴する読者自身のかつての小さな喜びや小さな悲しみの思い出であろう。そして、次の印象は、この小品は、幼少年時代の2人の少年を扱っているものの、この作品は子どものために書かれたスケッチ、いわゆる「童話」ではないということである。一見、子どものために書かれたかのような文体でありながら、ユーモアやアイロニーに富んだその軽妙洒落な文章は、「子ども」よりもさらに洗練された読み手、すなわち「大人」の読者に対して向けられている。

この自伝的スケッチの執筆は、結果的には2つの報酬をミルンにもたらすことになる。第一は、13年後のミルンの自伝の出版である。第二は、翌年の1926年の『クマのプーさん』の出版である。まず、その執筆において本作品の大部分がリサイクル（再利用）されることになったミルンの自伝を見てみよう。

3. 自伝『今からでは遅すぎる』との関係

『ぼくがとて小さかったころ』は、もっぱらミルン自身の子ども時代にスポットを当てて書かれたスケッチであった。子ども時代を回想する散文の執筆はミルンは興に入った。否、子ども時代を回想する文学の魅力（子どもの視点と大人の視点が錯綜する文学の魅力）に取り憑かれたに違いない。というのも、この子ども時代の回想体験はミルンの自伝『今からでは遅すぎる』（*It's Too Late Now*, 1939）へと結実していくことになるのだから。彼自身の幸せな子ども時代を追体験する本作品が発表された1925年から13年後の1938年、ミルンは奇妙な自伝を出版している。「奇妙な」というのは次のような理由からである。

その自伝の執筆動機について、彼の一人息子のクリストファー・ミルン（『クマのプーさん』のクリストファー・ロビンのモデル）は、大人になって父の姿を回想した『クマのプーさんと魔法の森』（*The Enchanted Places*, 1974）のなかで、父親ミルンの自伝の執筆の動機を次のように言う。

1938年、父は56歳の時に『今からでは遅すぎる』を書いた。「ある作家の自伝」という副題こそ付いているけれど、内容はそんなものではない。それは1人の少年の物語である。最初の3分の1までで、父は人生の最初の11年間しかカバーしていない。半分まで行っても最初の18年である。

というのも、父は自分を喜ばすためにその自伝を書いたのだから。どうやって偉大な作家になったかが読者に語られることはない。成功を自慢しているわけでもない。肩を並べた有名な人たちのリストが与えられるわけでもない。遺憾ながら、プーの本についてはわずか8頁しか割かれていない。そんなものを期待してはいけないのだ。父が自伝を書いたのは、少年時代——父のインスピレーションのすべての源であった少年時代——に帰る機会を得るためだったのだから。

（Milne, Christopher 158）

人間、年齢（よわい）を重ねれば、辛いことや悩みも増えるに違いない。56歳となったミルンのストレスには幼少年時代の心呼び戻すのが一番だったのかもしれない。書いて少年の心呼び戻せたならば、大人として生きることの悩みも薄れたであろう。事実、失われた子ども時代に対する生涯のノスタルジアこそミルンの児童文学の基調である。かつては誰もが子どもだった。そして誰もが子ども時代に帰りたと思うときがある。それは失

われた黄金時代——人生が至高状態にあった頃の状態——への回帰願望であり、またその回復を願う夢想でもある。それは聖書の「失樂園」(Paradise Lost)の、あるいは中世ラテン詩の「いまいずこ」(ubi sunt)のトポス(反復される詩的概念)に通底する主題である。『失樂園』の作者ジョン・ミルトン(John Milton, 1608-74)ならずとて、A. A. ミルンもその例外ではなかったということか。

ミルン自身はその自伝を『今からでは遅すぎる』と命名した理由として、「序文」に次のように述べている。彼が人生の幼少年期に強い執着を示すのは故なしとしないのである。

たぶん、この本の題名『今からでは遅すぎる』については、多少の説明が必要かと思われる。これは、私がもう一度、人生をやりなおすとしたら、エンジニアになったり、宗教家になったり、株の仲買人になったり、または、今よりより良い人間になったりしたいが、そういうものになるには、残念なことに、今からでは遅すぎると、そう言っているのではない。私の意味するところは、子どもをその子にするのは、遺伝や環境であり、その子が大人になり、その大人が作家になるのであって、そこで、今からでは、いや、すでに四十年前でも、ちがった作家になるには、もう遅すぎたということなのである。私はこの言葉を後悔の念をもって言っているのでもなければ、自己満足の意味で言っているのでもない。ただ、一つの事実として述べているだけである。(下線引用者；石井 08)

ミルンのこの言葉は、2008年4月2日(水)に101歳で逝去した児童文学者の石井桃子(1907-2008)が子どもたちに与えたメッセージ「子どもたちよ」と通底するものである。言うまでもなく、石井桃子とは『ノンちゃん

雲に乗る』(光文社、1951)などの作者、また1940年(昭和15年)からはミルンの『ブー横町に立った家』(岩波書店、1942)、『熊のブーさん』(英宝社、1950)、そして晩年2003年のミルンの自伝『今からでは遅すぎる』(岩波書店、2003)の翻訳をはじめとして、数多くの英米文学を訳出した児童文学者である。我が国へのミルン文学紹介において、最大の貢献をなした人物と言っても過言ではない。次の言葉は、その石井桃子氏が94歳の時に子どもたちに託した彼女の熱い思いの詰まったメッセージである。

子どもたちよ
子ども時代をしっかりと
たのしんでください
おとなになってから
老人になってから
あなたを支えてくれるのは
子ども時代の「あなた」です。

石井桃子 2001年7月18日
(『NHKアーカイブス』)

ミルンにとっても幼少年期が持つ意味は大きい。先に引用した石井桃子氏訳の「序文」にも明らかなように、ミルンもロマン派詩人ワーズワスの「子どもは大人の父」(The Child is the father of the Man.)という金言、幼少年期の体験が人を作るという信条の信奉者の一人である。事実、ミルンはこの「序文」の冒頭で開口一番、「私が有名な人の伝記を読んで興味深く感じるのは、はじめの半分なのです」と明言し、伝記文学に接するときには、他人の伝記でも(具体例としてミルンはキーツの伝記を挙げている)、自分の伝記でも、彼の興味は人生の最初の時期、すなわち幼少年期に向かうと言う。彼の一人息子クリストファーが指摘していたように、ミルンの自伝の3分の1はその人生の最初の11年しかカバーしていない。ミルンにとって幼

少年期がいかに大きな比重を占めていたかということの証しである。故に、ミルンの描いた自伝的スケッチ『ぼくがとても小さかったころ』も、当然のことながら、中心は幼少年期のエピソードとなる。一般論として言えば、すべて優れた伝記作家は、多少の差はあっても、対象となる作家の子ども時代に関するエピソードの重要性を理解しているものである。しかし、ミルンの自伝の場合、全篇、これ作家の子ども時代に関するエピソードという感が否めないのである。

そして、この小品にこっそりと忍び込んでいる感情はノスタルジアの感情に他ならず、その実体は郷愁の念に満ちた子ども時代の思い出である。換言すれば、人間らしさの根源でもありながら、容易に失われてしまう子ども時代に対する作者の不変の渴望と言ってもよい。当然至極、大人になってから懐かしい思い出の時代を回想するミルンの筆には愛情と深い憐憫が込められている。

4. 『クマのプーさん』との関係

A. A. ミルンは3人兄弟の末っ子として生まれた。2人の兄のうち、特にひとつ年上の次兄との仲を抜きにしてミルンの幼少年時代を語ることはできない。また、自伝『今からでは遅すぎる』における子ども時代の記述、特にその幼少年時代の記述において明らかなように、ミルンの次兄との関係を語るこそミルン自らを語ることになる。いつも一緒に行動した次兄とはまさに一心同体の関係であって、自伝にも示唆されているように、この兄と共に過ごした時間こそがミルンにとっての黄金時代、至福の一時だったのである。

幼少年時代を回想するミルンのスケッチ、『ぼくがとても小さかったころ』の中心をなすのは、2人の兄弟がいつも一緒に、どのように行動し、どのような思いを心に紡ぎ出し

ていたかを述べる、幸福な時代についての回想である。そこに読者が見出すのは確かな樂園、平穩で安らかな世界である。子ども本来の姿、ものの見方、考え方を浮き彫りにしたリアル（現実的）かつファンタスティック（幻想的）な子どもの世界の再現である。そして、スケッチはやるせなく滑稽な子ども像の描写で結ばれる。本作品を締め括る最後の一文は、ミルン自身がフラッシュバックする子ども時代の空気が凝縮された「甘酸っぱさ」そのものであり、「いまいずこ」（ウービ・スト）となってしまった「失われた子ども時代」へのノスタルジアである。

この作品を読む読者の読書行為は、幼いミルン兄弟が体験する小さな喜びや小さな悲しみに共鳴し、読者自らの子ども時代の同類の体験を回想し、それらを追体験する行為に他ならないであろう。つまり、読者は、我知らず、ミルン兄弟のものの見方や考え方に共感するのである。

『ぼくがとても小さかったころ』は、やがてミルン文学の金字塔、その名を世界に知らしめる児童文学の古典「クマのプーさん」シリーズへと発展していく。このスケッチに読者が見るミルン兄弟の姿はまさしく「クマのプーさん」に表象された世界の先駆けである。「クマのプーさん」シリーズとは、無論、石井桃子氏が訳出して日本人に紹介した2篇の物語——『クマのプーさん』（*Winnie-the-Pooh*, 1926）と『プー横町に立った家』（*The House at Pooh Corner*, 1928）——であり、主人公クリストファー・ロビンとプーの仲は世界中の読者がよく知るところである。以心伝心の2人の様子は、鋭い感覚とユーモアをもってミルンと次兄の2人を活写した少年時代のミルンの無垢で純朴な心から発せられたスケッチと通底する。自らの幼少期に強い執着を示した作家ミルンの筆致、大人になって

から自らの幼少年期のさまざまな心の動きを回想するミルンの筆致に窺える愛情と共感が「クマのプーさん」シリーズにも込められているのである。

そして、2篇のプーさんの物語、『クマのプーさん』も『プー横町に立った家』も、それぞれが10章に分かれており、各章が独立したエピソードで「10編の短篇物語から構成された二冊の短編集」（安達 8）とも言うべきものである。実は、その体裁は7つのスケッチ（素描）と7枚のイラスト（挿絵）から成る『ぼくがとても小さかったころ』のスタイルを踏襲したものに他ならないのである。

むすびに

『ぼくがとても小さかったころ』の最後は、やるせなく滑稽な子ども像の表象で終わっている。前述のように、この自伝的スケッチは1925年に発表された翌年の1926年、ミルンは「ほのぼの癒し系」文学の古典、30種類以上の言語に翻訳された世界的なベストセラー、性格のいい、優しく礼儀正しいクマ、ちょっと間拔けで気楽なプーを主人公とする物語『クマのプーさん』を書き上げることになる。ミルン独特のユーモアとシェパードの絵柄が渾然一体となった味わい深い「クマのプーさん」シリーズの雛形が実は『ぼくがとても小さかったころ』なのである。事実、この小品は童話作家としてのミルンの生成と発展を理解する上でキーテキスト（鍵となる作品）とも呼ぶべき作品である。

しかし、このスケッチを一読して得られる感想、素朴な読後感は次のようなものであろう。子ども時代のほんの小さな悲しみも、ほんの小さな喜びも、作家の優れた感性と想像力のうちにあっては、たとえ無意識裡にであれ、限りなく拡大され、後に成人となった時に芸術作品へと結実する萌芽となる場合があ

るということである。

童謡詩集『ぼくたちがとても小さかったころ』では周囲の子どもたちを鋭敏に観察し、それを韻文で謳歌した童謡詩人は、今度はスケッチ『ぼくがとても小さかったころ』では自らの幼少年時代を回想し、それを散文によって謳うことを試みた。この小品によって、童謡詩人から児童文学者としての端緒を開いたミルンは、13年後に散文による優れた伝記文学『今からでは遅すぎる』を結実させることになるが、それ以前にミルン文学のエッセンスとも言うべき独自のユーモアと軽妙洒落な精神を、世界にその名を刻むことになった『クマのプーさん』へと輪廻転生させたのである。

参考文献

- Eaton, Anne T. "New Books for Children." *New York Times Book Review* (17 Aug., 1930): 15.
- Milne, A. A. *It's Too Late Now: The Autobiography of a Writer*. London: Methuen, 1939.
- . *Now We Are Six*. London: Methuen, 1927.
- . *The House at Poor Corner*. London: Methuen, 1928.
- . "When I Was Very Young." *Woman's Home Companion* (Dec., 1925): 22-23. Rpt. *The New Magazine* (June, 1926) 383-88.
- . *When I Was Very Young*. By A. A. Milne. Illustrations by Ernest Shepard. 26pp. New York: The Fountain Press, 1930.
- . *Winnie-the-Pooh*. London: Methuen, 1926.
- Milne, Christopher. *The Enchanted*

- Places: A Memoir of the Real Christopher Robin and Winnie-the-Pooh.* New York: E. P. Dutton, 1974.
- Swann, Thomas Burnett. *A. A. Milne. TEAS 113.* New York : Twayne Publishers, 1971.
- Thwaite, Ann. *A. A. Milne: His Life.* London: Faber and Faber, 1990.
- Tori Haring-Smith, *A. A. Milne: A Critical Bibliography.* New York & London: Garland, 1982, p. 209.
- 安達まみ. 『くまのプーさん 英国文学の想像力』光文社新書, 2002.
- 石井桃子. 『ミルン自伝 今からでは遅すぎる』A. A. ミルン著. 岩波書店, 2003.
- 『NHKアーカイブス「あの人からのメッセージ2008」』日本放送協会, NHK衛星第2 (BS 2), 2008年12月29日.
- Annotated Bibliography*) を作成中である。拙論はその過程において蒐集した言語資料を分析した結果の一例であることを付言しておく。

附記

拙論は、本文でも言及したように、日本の児童文学研究において多大な成果を遺した偉大な児童文学者、石井桃子氏にささげるオマージュである。

また、拙論は、A. A. ミルンの“幻の書”と称される『ロンドンの恋人たち』(*Lovers in London*, 1905) — 生前、作者自身が再版を禁じた故に未だ絶版となっている図書 — をはじめとして、個人で購入するにはあまりに高額となってしまったミルンの一連の作品群《A. A. ミルン稀覯本セット》の購入を可能ならしめた金城学院大学の研究助成「2008年度設備費申請分」による研究である。ここに金城学院大学に対して深く感謝の意を表明する。現在、本学の大学院生と共同研究の形で、A. A. ミルンのキャノン（正典）についての総括な書誌、「A. A. ミルンの注釈付き資料目録」(*A. A. Milne's*